

総合討議の総括

統一テーマ「ロマンス諸語における言語教育」

黒澤 直俊

1. はじめに

日本ロマンス語学会第 60 回の統一テーマは「ロマンス諸語における言語教育」であった。大会は ZOOM を用いた全面オンラインで 2022 年 5 月 14 日（土）、15 日（日）に開催され、統一テーマでは 7 件の発表があり、発表の後に総合討議が行われた。以下、発表の要旨と質疑応答の内容を簡単に紹介する。発表者の敬称は略す。以下の発表のうち、蔦原、柿原の両氏は論文として発表をまとめたものを本号に掲載している。

2. 研究発表と総合討議

(1) 小澤南海「ヨーロッパ言語共通参照枠に基づくフランス語リスニング教材の分析」

ヨーロッパ言語共通参照枠のレベルが付与されているフランス語のリスニング教材を対象にレベル判定に重要な音声指標を明らかにすることを目指し、先行研究で指摘のあったリスニングの難易度に相関する音声的変数について重回帰分析を試みたところ、1 分あたりの音節数、ポーズ間の語数、ポーズの平均の長さの 3 つが難易度判定に影響し、特にその中で音声の難易度に最も影響するのはポーズ間の平均語数であるとの結論を導いた。ただし、この分析でのレベル判定の精度は 62% で、要因のさらなる精査やデータ数の拡大が必要であるとされた。

[総合討議]

この研究を完成させるためには大量のデータの処理が必要となり、データ処理の自動化は必須と思われるが、その場合、自動で音声指標の外れ値などを処理する方法などについて考えているかとの質問があり、今回の研究で対象とした要素はまだ限られているので、今後はレベル以外に音声の種類や真正性、ためらいやフィーラーなども考慮に入れることで判定の精度を上げて行くことが必要と考えていると回答があった。

(2) 杉山香織「フランス語学習者の自由会話における使用語彙レベル分析 – 留学経験による比較」

フランス語学習者の自由会話データコーパスを用いて留学経験に応じた語彙使用のレベルや使用傾向を、語彙知識の一面とされる多様性や頻度、過小使用の傾向などに注目し、分散分析や対数尤度比を用い分析した。その結果、CEFR の A1 レベルの学習者では、留学経験無または半期以下の留学、通年（1 年間）の留学、通年以上の留学という 3 つのグループでは、留学経験に応じた語彙使用の差（＝留学の語学的成果）が見られるが、これが A2 レベルになると、半期以下の留学と通年留学のグループには有意差が見られず、通年以上の留学経験者との間のみに差が生じ、B1 レベルの学習者で差がみられるのは、半期以下と通年以上の留学経験者の間で、留学期間が通年を超えるグループでは有意差がないという。過小使用語についての分析では、口語特有の表現

や談話標識に類する類のものは留学期間が短いと使用頻度が低くなる傾向にある。また、使用されている語の大部分は A1 レベルで、学習者のレベルによる差異はあまりない。そこから、教室でのスピーキング指導では談話標識や A1 レベルの語を副詞などにポイントをおいて指導するのが効果的とされた。

[総合討議]

発表では機能語の分析が中心だったが、内容語については何か特筆すべきことがあったのかという質問があり、それに対しては、内容語は会話のトピックなどに引かれてしまうのかレベルや留学経験の差からの変異はあまりなく、もちろんコーパスの規模などが影響しているかもしれないが、分析は機能語が中心になったとの回答であった。

(3) 葛原亮「スペイン語における熟語の使用頻度に関する研究」

スペイン語では頻度の高い 5000 語程度の語彙で言語活動の 9 割程度がカバーされると言われるが、複数の語連続で、その中で特に透明性の低い熟語の場合、最頻 5000 語に相当するものがどれくらいあるのか、さらにそれらの語連続の学習上の重要性や役割を考察した。具体的には、スペイン語コーパス esTenTen2018 から語の頻度リストを作成し、5000 番目の *preocupante* が 200986 回生起しているので、N-GRAMS を用い 2 語から 6 語の連結を取り出し、相当する頻度の熟語をリスト化した。N-GRAMS が抽出する連続には無関係なノイズが含まれているため、語連続に熟語の推定頻度を適用し、5000 語に相当する重要度のものを抽出した。結果的として 216 の熟語リストが作成された。うち最重要 1000 語程度の熟語に着目すると、前置詞や接続詞のような機能を担うものが多いという。

[総合討議]

頻度の区切りとしての 5000 語は単語家族なのかという質問があり、単語家族にまとめれば、もう少し数を減らせるだろうという回答であった。また、コーパスについての質問があり、話し言葉や書き言葉をはじめ SNS まで含む、雑多なコーパスであるが、規模が大きいというのが利点との回答であった。高頻度語の動詞について名詞との共起関係などをまとめたら、学習者には有益ではとのコメントには、実は別件でそういう取りまとめを試みているところという回答であった。さらに、複合名詞的なものでは、透明性の高いものとそうでない熟語的なものがあり、個別に判断して処理したという。

(4) チェスパ・マリアンナ「イタリア語における時制の一致の規則の教え方に関する考察」

日本人学習者にイタリア語を教えていると、主節の動詞が近過去形で、従属節に現在形が現れる文は時制の一致の規則に違反しているのではという質問が多くされる。発話の時点と主節の動詞の時点という二つの基準点に関して、イタリア語や英語のように Double Access Reading を認める言語と、日本語やルーマニア語、ロシア語のような言語の間に存在する違いが原因である。この場合、従属節は補足節で、かつ動詞が状態を表すものであることが条件になるが、教室での説明では、イタリア語の近過去形にアオリスト的用法と完了的用法があることなど、対照研究と

語学教育をつなぐことが必要と主張された。

[総合討議]

質問・コメントとして、イタリア語の近過去形と遠過去形の使用に関するものがあり、北部から中部、南部にかけて近過去形から遠過去形への推移が見られるという回答であった。他に、日本語は時制言語ではなく、アスペクト言語だという指摘や、時制の一致には英語教育の否定的な影響があるのではというコメントがあった。

(5) 山本真司¹、久保博「si と si (再帰代名詞と非人称代名詞)：現場の教員、学生からの質問に答えて」

イタリア語では再帰代名詞と非人称代名詞の si の重複は認められず、その場合 *si si の代わりに ci si という形にしなければならないと規範文法では教えられる。しかし、北イタリアの諸方言では si si や se se が普通に使われることや、流行歌に *Poveri, si può amarsi anche i poveri* のように si が重複している例がある。そこから si の重複は本当にはないのか、そして同一文中に si が二つ現れている場合、そのいずれが再帰と非人称の接語かという点についての考察。先行研究に助動詞がある構文で接語が隣接していない場合は、やや非標準的なイタリア語では重複はあり得るとの記述があり、また通時コーパスでも si の後に現れる *potere, dovere, sapere, volere* の活用形の後に -rsi で終わるものとして検索すると 1865 年から 1999 年まで 66 の用例が存在する。ここから、イタリア語では si si と二つ直接的に隣接する構文は非文法的であるが、法助動詞が用いられ、再構造化が起こっていない構文では、すすめられるとは言えないものの、あり得るのだという結論であった。

[総合討議]

いくつか質問やコメントがあり、流行歌の問題の部分は *i poveri* がお互いに愛し合うという相互的な意味であるとか、連続する二つの接語のうち、最初に来るものが非人称で次が再帰代名詞と解釈するのがよいのではというコメントがあった。後者については、ヴェネト方言ではその解釈でよいが、イタリア語では最初の接語は主語のスロットにあるのではないという考え方もあるとの回答があった。

(6) 柿原武史「非母語話者に対するガリシア語教材で扱われるテーマと言語回復政策について」

非母語話者に対するガリシア語教材として標準的な *Aula de Galego 1~4* を対象に教材のアクティビティーを分析し、どのようなテーマが扱われているか考察したもので、ガリシアやガリシア語、その文化に関する課題、商業や産業の現場での口頭や文書でのやり取り、メールやメディアなど現代的な話題を扱うものが多く、反面、行政やガリシアの主力商品、スポーツ、医療関係、

¹ 東京外国語大学の山本真司会員は 2022 年 2 月 8 日ご逝去された。発表は山本氏が生前に準備されていて、久保会員としばしば内容を話し合っていたことから、久保氏が手を加え、発表したもの。なお、山本会員のご逝去後、東京外国語大学語学研究所の風間伸次郎所長の呼びかけにより教員有志で弔意を表明することが出来た。それにより山本会員の様子を知ることが出来たのは我々同僚にとってはささやかな慰めであった。(黒澤記す)

獣医学、外国人向けのガリシア語教育やポルトガル語圏とのつながりなどについてはあまり扱われていないという。

[総合討議]

四技能別にテーマの傾向を考えると違いはあるかという質問があった。

(7) 富盛伸夫「CEFR の新展開とスイス複言語社会におけるロマンシュ語教育」

近年の CEFR の思想的推移を概説し、さらに多言語国家スイスでのロマンシュ語を例として取り上げ、やはり地域の少数言語であるフランコプロヴァンス語のようなパトゥワとしてではなく、準公用語的な位置づけで行われている言語政策や、地域ごとの教育の現状などを詳細に概説した。

[総合討議]

フランスでのパトゥワとの類推から、フランコプロヴァンス語はパトゥワで、ロマンシュ語はそうではないという状況についての質問があった。ロマンシュ語は 1996 年に公用語として位置づけられているが、現実には準公用語的であるのではというコメントがあり、それは連邦レベルで公用語とすると通訳や翻訳など費用負担が莫大なものになることから、それを回避するような形で現実的折衷策であることや、地域ごとの小学校教育における差や家庭内の言語についての質疑があった。

3. まとめ

今回はフランス語、スペイン語、イタリア語、ガリシア語、ロマンシュ語などを対象に 7 件の発表があり、総合討議の議論も豊かであったと言ってよい。内容的にも教材の分析から言語政策、中間言語の分析など言語教育学的なものから、教育現場で問題になり得るような熟語の頻度や時制の一致、接語代名詞など言語構造に直接かかわる内容にわたり、その意味でも興味深かったと言える。惜しむらくは投稿原稿として論文にまとめられたものが 2 点であった。投稿規定では曖昧だが、編集委員会の解釈では、発表内容の会誌への投稿は、論文または研究ノートとして掲載されるまで発表者が有する「権利」である。締め切りに間に合わなかったなど、今回投稿されなかった発表者も次回以降の会誌へ投稿されれば望外と言うほかはない。

(くろさわ なおとし・東京外国語大学名誉教授)